

## 対義形容詞「明るい」と「暗い」の意味的非対称性に関する一考察

### —アフォーダンスの視点から—

北京外国語大学 北京日本学研究センター 趙萱

対義語というのは、一般に、同一の言語の中で、意味が相反するものであるとされる（『大辞林 第二版, p.1518』）。しかし、対になる語が多義的である場合、それぞれの意味がすべて対義的に対応するとは限らない。

本稿では、「明るい」と「暗い」の連体用法を中心に、両形容詞の共起名詞の非対称性について考察し、その非対称性が生じた原因についてアフォーダンス理論で検討する。考察する際に、NLB(NINJAL-LWP for BCCWJ)という日本語コーパスツールを用い、「明るい+X」と「暗い+Y」のそれぞれの共起名詞を抽出して調査を実施した。また、「明るい」と「暗い」の共起名詞の所属する分類項目に焦点を当て、この両形容詞の共起名詞の分類項目のコーパスにおける出現頻度からその意味的非対称性について検討してみた。

調査した結果、この両形容詞はそれぞれ特徴的な共起関係を持ち、「明るい」は主に〈色〉を表す名詞と共起しやすく、「暗い」には主に自然関係の名詞、特に〈通り道〉という種類の語と共起しやすい傾向が見られる。本稿は紙幅の都合で、アフォーダンス理論で〈通り道〉の後ろによく「暗い」が来るが、「明るい」と共起しにくいというような対義形容詞の意味的非対称性を解釈する。この両形容詞の〈色〉名詞類との共起関係について、今後の課題としたい。

アフォーダンス (affordance) は「環境が動物に与え、提供している意味や価値」である（佐々木 2015:60）。例えば、「野菜」は、人間にとって「食べられる」という価値を与える。さらに、同じ環境でも、提供する相手が変われば、与えられる価値は異なる。例えば、「水」は、人間にとって「飲む」や「浴びる」や「溺れる」といった価値を与えるが、魚には「えら呼吸」という価値を与える。アフォーダンスの視点から見れば、人間は世界に埋め込まれて存在している。

したがって、「暗い通り道」という表現を使うとき、我々人間は、通り道に「暗い」という属性や評価を与えている。アフォーダンスの視点から考えると、「暗い通り道」は、人間に「恐怖」や「不安」という有標な価値を与えるが、反対に、「明るい通り道」は、人間に「安心」を与えるわけではなく、単に「通り道」の価値である「通れる」ことのみを与えていると考えられる。我々は自分と世界とのつながりを作るために、生まれつきの組織された身体が設けられている。「見るシステム」で周囲の物事を知覚し、思考することと同時に、自己を知覚し、さらに自己を語っているのである。「暗い」+〈通り道〉という共起関係では、話者(知覚者)が周囲の環境の変化、すなわち光の量が多い「明るい」環境から光線が足りない道を通るとき、目でこうした変化を知覚し、「道は暗いな。通りにくくて嫌だな。」という心理状態が生じてきており、それと同時に、また環境の知覚を得た自分のことを知覚するということになるのである。